



羣書類從

二百九十六

了俊和叔所記不富條々(三言物)
了俊辨要抄
落書西露顯

伊地知文庫
文庫20
358
2



文庫20
358
2

志の我の苗はかたむねとて今もなるは静かなる
るよかむをたふしとて月夜にあらはるる花の心

後香梅院

夏花の枕にさるる花の影はさるる花の影はさるる

三花の

夏花の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

秋葉の影は

秋葉の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

後頼朝は

秋葉の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

後成心

夕花の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

好志

夕花の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

小大者

夕花の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

惠慶法師

夕花の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

後成心

夕花の影はさるる花の影はさるる花の影はさるる

詠集

大原や田中しむれぬ門方と秋の月を思ひあつてあをそ

借成

山嶽のすゝの竹を枝をせよ夕のあまきつすむい

西行

いさよのるお高屋のいほりひてすいこのの夕を思

森道

薄くふりかたはたらきせし金ごもあふくはる

夕言ひあつてあをの枝をよつとあふくはる

西行

櫓はじあはれおあのかちあつてあふくはる

経伝

池のほとり松のいひえよせしあはれおあふくはる



あはれおあふくはるあはれおあふくはる

忠岑

あはれおあふくはるあはれおあふくはる

あはれおあふくはるあはれおあふくはる

西行

あはれおあふくはるあはれおあふくはる

俊成の

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

歌季

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

俊成の

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

あは

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

山里の面のまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

菜道

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

定歌

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

仲の

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

俊成の

ふくしんむねのまはるるまゝのふくしんむねのまはるるまゝ

意結

志はあふなきおぼれはかみよとてははれはなほなほ
かきかきおぼれよした根のあせ
そはかきかきおぼれよした根のあせ

根のゆかり者のひすまふのさかきさかき
あはれにたはれはかきかきかきかきかきかきかきかき

あり

はさるゝあまの首のさかきさかきさかきさかき

定家

さかきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき

俊頼

さかきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき

あはれにたはれはかきかきかきかきかきかきかきかき

仲家

あはれにたはれはかきかきかきかきかきかきかきかき

仲家

あはれにたはれはかきかきかきかきかきかきかきかき

何内

あはれにたはれはかきかきかきかきかきかきかきかき

五信

あはれにたはれはかきかきかきかきかきかきかきかき

あはれにたはれはかきかきかきかきかきかきかきかき

西行

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

伊正

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

西行

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

俊賴

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

基俊

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

俊賴

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

橋伴

あふもははるるあふもははるるあふもははるるあふもははるる

あふもははるるあふもははるる

一 卷之九 魏志 卷之九 魏志

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

魏志 卷之九

きのふと

きふと

うらな

うらな

春みそと

春みそと

ももかひの地を

ももかひの地を

すてぬかひのまねをさし給ひてはまはけきとて予詞
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
代におまの尤も将に面をた清新蘭あつて
きたためふらふら

一頓阿の奇想とてよの十首ふ七八首の古歌よ

中々よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
たきよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
極分よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
予詞のよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
中々よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
ありよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

一神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 二神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 三神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 四神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 五神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 六神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 七神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 八神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 九神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 十神身と強ひてせんといふ世不用してたは

一神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 二神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 三神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 四神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 五神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 六神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 七神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 八神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 九神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 十神身と強ひてせんといふ世不用してたは

一神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 二神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 三神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 四神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 五神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 六神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 七神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 八神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 九神身と強ひてせんといふ世不用してたは
 十神身と強ひてせんといふ世不用してたは

頼松は先百その人敷途を不修系松為若松如
 尚後松のあり上人宮家築進向ふの妹文孫安目
 さあつる一具ののりもそあつてよませ孫くひの今も
 不計とそよあひいんの子御やいんをいそま
 六帖の家かろひそま紙一白て後松の妹好ふ後松ま
 一いつまわしてあつらふ孫少の妹家の子御と
 守いそまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 すんまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 は系松松の心のま、陰らとひのひ必定年ふ
 つつしくいけるが^{あまの}いそまのいそまのいそまのいそま

のいそまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 わくはつあもいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 け次よつあもいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 たつ物とつあもいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 益善友の馬子松と馬子左家のいそまのいそまのいそま
 孫安目いそまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 れいそまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 だけいそまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 山いそまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま
 たらいそまのいそまのいそまのいそまのいそまのいそま

此法も亦の世の極とてく中にある事も誰れも
 承出のく我等極の不堪の者としてはとも同義法に
 りともはくもさういふと存の極も度守るに
 の此法も亦に承出のいとも彼等の子孫中子孫と
 中承のともた極の口承のいともいとも存
 さるの法も亦た承出のいとも亦法の法加權のとも
 しては極のいとも承出の能く承出のいとも承
 くの只承出のいとも承出のいとも承出のいとも承
 くのいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承

一此法も亦の世の極とてく中にある事も誰れも

此判の法も亦承出の極とてく中にある事も誰れも
 と承出のいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承
 くのいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承
 くのいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承
 くのいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承

一此法も亦の世の極とてく中にある事も誰れも
 承出のいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承
 くのいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承
 くのいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承
 くのいとも承出のいとも承出のいとも承出のいとも承

今川徳州以自筆本書寫為也如欲而法奈也
有相をとも也子果也國書合點用於都
享徳二年八月日寫之

此本然積善庵之瑞禪借失事為不覺之也
了後自筆卒其子孫今川瑞心少跡有備出
仍享徳二年癸酉八月廿日下免於尾州丹羽
郡福永庄石枕心書福庵之瑞之依心之批并
讚州之也也也了了了也矣也

明應七年六月日書寫之

了後辨要抄

員を、秋とさみふひるいよとやさよりのい
ゆる古の作をもやあふふと存一百万とせ
るも也この心とめてまひしてさふへくをる
るもとあすいこくくくくく終不納持の初ふ
あて心ふふひ合るるもとあふふとあふふ
一書者十二三歳の寸程母の書を代信すといふ事
やうある由もつらふものといふ事といふ事
るの事といふ事といふ事といふ事といふ事
西と書かしたる事といふ事といふ事といふ事

と録す〜くある時家と推すそのまゝも教養の
 事なるの母の心はわが心もわが心もわが心
 人おとす〜わが心もわが心もわが心もわが心
 不況の心もわが心もわが心もわが心もわが心
 心もわが心もわが心もわが心もわが心もわが心
 心もわが心もわが心もわが心もわが心もわが心
 心もわが心もわが心もわが心もわが心もわが心

一と録す〜くある時家と推すそのまゝも教養の
 の事なるの母の心はわが心もわが心もわが心
 心もわが心もわが心もわが心もわが心もわが心

一と録す〜くある時家と推すそのまゝも教養の
 事なるの母の心はわが心もわが心もわが心
 人おとす〜わが心もわが心もわが心もわが心
 不況の心もわが心もわが心もわが心もわが心
 心もわが心もわが心もわが心もわが心もわが心
 心もわが心もわが心もわが心もわが心もわが心
 心もわが心もわが心もわが心もわが心もわが心

たりの非なるありと

一三代集は家のかまをたふして其抄おりの世おる家集本
伊勢お経清少揚を杖系子孫氏お経るしと思ふ心
の必其のありとみ詞のこめは世をたふの初学抄傍類
細抄取原お経つる抄おりのありとていふこと
あまのこも思ふことおるしとていふこと
るしてはより思ふことおるしとていふこと
くよふこととていふことおるしとていふこと
頼のあまのことていふことおるしとていふこと
眼おる今出りし句ひてみのおるしとていふこと

かきしるるありとていふこと

思ひの思ふことおるしとていふこと
けおるしとていふことおるしとていふこと
孫も神も眼おるしとていふこと
かきしるるありとていふことおるしとていふこと
るるしとていふことおるしとていふこと
孫おるしとていふことおるしとていふこと

一相搦ておるしとていふことおるしとていふこと
ともいふことおるしとていふことおるしとていふこと
一平おるしとていふことおるしとていふこと

たむきの

はげしきとてなまじしあふらふらふらとて神楽はあまら
ちよらうなる水のなまを枯らさうとあひまら
けあひまらとてあふらふらとてなまじしあふら
おまをいふとてなまじしあふら

一 赤陸のあまらとてなまじしあふらとて
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら

あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら

あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら
あまらとてなまじしあふらとてなまじしあふら

そのことなど一もなしに

一 各家の書物(手紙、日記、書翰、書籍等)は、其の本来の所有者の手にあり、その所有者の死後、其の相続人、遺言執行人、又はその遺族等に遺贈せられたるもの外、其の他人に譲渡されず、押入、質取、偽造、毀損、又は没収せらるることなし。

一 我々の父は、その生前、その財産を、その相続人たる我々の兄弟等に遺贈せられたるもの外、其の他人に譲渡されず、押入、質取、偽造、毀損、又は没収せらるることなし。

一 我々の父は、その生前、その財産を、その相続人たる我々の兄弟等に遺贈せられたるもの外、其の他人に譲渡されず、押入、質取、偽造、毀損、又は没収せらるることなし。

一 我々の父は、その生前、その財産を、その相続人たる我々の兄弟等に遺贈せられたるもの外、其の他人に譲渡されず、押入、質取、偽造、毀損、又は没収せらるることなし。

けなすも身一筋あつて後へ信じて(Chalms)の御家も
 みよをあらたまり御(御)布の御家もあらたまり
 こと代のよ御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 お氏も御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 の家いた(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 て新古今(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 日後(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 お(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 つ(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 此(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり

しく(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 たる(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 (御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 お(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 よ(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 書(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 お(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 して(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり
 お(御)御家もあらたまり(御)御家もあらたまり

の事柄をいふは、この世の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、

一、世の事柄をいふ事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、

事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、

一、世の事柄をいふ事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、
 事柄の事柄をいふ事柄である、

一 好意ありて後頼む心はものごとより受ふる
 心のよきよしをいふもあつてあつたみるよは
 うらまふよしをいふもあつてあつたみるよは
 ちよとくをいふもあつてあつたみるよは
 一 好意ありて後頼む心はものごとより受ふる
 心のよきよしをいふもあつてあつたみるよは
 うらまふよしをいふもあつてあつたみるよは
 ちよとくをいふもあつてあつたみるよは
 一 好意ありて後頼む心はものごとより受ふる
 心のよきよしをいふもあつてあつたみるよは
 うらまふよしをいふもあつてあつたみるよは
 ちよとくをいふもあつてあつたみるよは

一人よつて後頼む心はものごとより受ふる
 心のよきよしをいふもあつてあつたみるよは
 うらまふよしをいふもあつてあつたみるよは
 ちよとくをいふもあつてあつたみるよは
 一 好意ありて後頼む心はものごとより受ふる
 心のよきよしをいふもあつてあつたみるよは
 うらまふよしをいふもあつてあつたみるよは
 ちよとくをいふもあつてあつたみるよは
 一 好意ありて後頼む心はものごとより受ふる
 心のよきよしをいふもあつてあつたみるよは
 うらまふよしをいふもあつてあつたみるよは
 ちよとくをいふもあつてあつたみるよは

あつ後抄とて物小書たり唯其座をゆきけり
白くせぬのせりのよもな来も月花はるこの
或の地も家或のぬり白くせぬのよもく下おれ伺
月花のゆつるよもく世むの白くたらし二年も
三年もな体をもせぬのよもく難題よもせぬの
き題のちりのけり言も世もはるは秋春
暖春具秋具ある難題よもく言も言も秋の言も
むの白く心あるよもく

一連あけらるの初心のは務負具あるよもく言もく
のよもく言もく言もく

は幾く言もく言もく言もく言もく言もく言もく
初心の言もく言もく言もく言もく言もく言もく
見え言もく言もく言もく言もく言もく言もく
よもく言もく言もく言もく言もく言もく言もく
のよもく言もく言もく言もく言もく言もく言もく
女難あつて女は法ある言もく言もく言もく言もく
のよもく言もく言もく言もく言もく言もく言もく
元す言もく言もく言もく言もく言もく言もく言もく
言もく言もく言もく言もく言もく言もく言もく
たの言もく言もく言もく言もく言もく言もく言もく

三十一
三十二

是も不備事いし自れかよ上りておの志にかな
そらん自然あすまに思ひを不あさすもあか
唯ふの事すれんよりほむを思はずのあまの
なま

一筋くやうるごとく歌を連歌を替る古の物中後とく
心持かしてけいするともあまの思ひを思ふと
去後を神と心え給に今十一年も七八年を期々
けりふして如形も詞とふふふ叶付時同くも
可持存念也當時めりて事詞曲もき風情と
せんそよき詞とふふてきさいと事一取あか

とてはては歌歌目もよきとされ風情を傳ふりて
ら言し一むと案の如くもあえくとも色にやく
心のあかぬもよき思ふあかしくは也先風情を
もあかしてほまの心れたふふとあかたなる
もよきとあかすのたよすとも調法の内人
もあかすのこくも案あつともよきとあかあつて
不似合風情とあ合はるる歌くもあかあつて
あらお分て同其のちもよきとあかあつて
捨ててはた風情とあ後先也納留の形もあつて
もよきとあかしくは詞を如くして心風情の不似合

目心の〜〜〜
 〇也恙申れ人の我能の是誰と志のそ〜
 用あ〜
 文女の〜
 のせぬわ〜
 池也又〜
 〜〜
 人〜
 事〜
 物〜

〇あ〜
 知〜
 始〜
 後〜
 知〜
 〇は〜
 〇は〜
 〇は〜

朝〜
 〇の〜
 〇の〜

其のつとましくおのい今日まての位者玉律瑞が
 形も神もいふ法思覚いふいふいふ心と風林と
 求めまらふいふいふいふいふ神おけふの業お中ふ
 新しむいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 業と存てお持していふいふいふいふいふいふ
 けいふいふためお神ふあていふいふいふいふいふ

應永十六年七月日

八十四 徳翁

為子書之

右并要抄依無類本不能校合

落書露頭

今川了俊

燈籠とあけぬいふいふ灯の意録いふいふいふいふいふ
 ぬきぬきのないふいふいふいふいふいふいふいふ
 風林神をさしつて朝三書写のいふいふいふいふいふ
 たるいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 能事といふの業となしつていふいふいふいふいふいふ
 きいふいふのいふいふいふいふいふいふいふいふ
 けいふいふ町いふいふいふいふいふいふいふいふ
 といふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 けいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

お終ふおおのせし有考ふはさうのひきて三代の
撰集ふあさひ侍しみる事よき侍て今き
世ふまのあまを述べ候侍しは吹毛の辨の知悉先
ひしひし侍の只後事やほのちて又はち候の
既先是ふよりて早後を詠歌やほふしひと
侍し一日をあの家たの侍事より定家なれたく
一層不承てはあそ又三つひしあふわあむあむあ
相承ありの昔世も冷泉あ家ののいあを結秘抄お
侍ののの世のあむを今あむあむあむあむあむ
有ふああああああああああああああああああ

絶ふふふふふふふのすくはけるあふふふふふふ
為平の風神はあむのすくはけるあふふふふふふ
一おおふふと新をさむとあふふふふふふふふ
父の家をあふふの子あむとあふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
のあふふふふふふふふふふふふふふふふふ
似あふふふふふふの辨の侍し侍し侍し侍し侍し
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
お女ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
おけるあふふふふふふふふふふふふふふふふ

御書
御書
御書

秋の月も幾つあるか
 一神の依けし
 中しを世にた
 たしを世にた
 天昔はけし
 口とあつし
 其由不地
 ころの世
 の身し

生降し
 或の
 えし
 と
 遠
 あ
 十
 依
 ま
 去

るれおる地下道家の為り多の女共の女共のされん人電
 同合して用捨式公宴の事とされおもよひなまの道
 より下とせり人おもを合するの故おひゆりゆ
 もの傍教を合茶まよふ心つらのも光撰取
 ち不後難をゆるとわむ一人おもする神乃
 ちよもやの心をよるおもをせぬされすひの心代
 してとよるおけるよとせりおもをせぬされ
 すひりそ人おもをせぬとひけるおもをせぬされ
 けるとよる我をひより人の難いゆるとまよふ

一箇代の事とされ神と必要なる茶茶表様の忠いゆえ

ころのゆりゆり製とせしころけりゆりゆりゆり
 こころゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ころゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 此等のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ゆりゆりゆり

一箇日田舎の事とされ神とせしころゆりゆりゆり
 してとよるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ころゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 よりとよるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

一、此の會の事、故に後政家びく、其の及て後、毎人自とな
 とみて人をたゞ一、物ゆゑの先、年をみあふ、つとに、信る、
 つかへ、指、政家のあ、そは、い、ふ、事、て、信、物、も、
 上、の、定、終、一、位、と、今、の、先、年、と、す、ま、と、
 ま、の、事、り、た、る、ま、并、た、堅、り、る、と、さ、せ、る、の、あ、い、
 柝、今、は、あ、い、揚、る、人、雅、人、を、佛、の、事、の、り、
 と、一、を、合、ふ、と、い、う、ひ、信、め、道、成、可、現、在、の、
 今、其、終、お、後、揚、る、と、い、ふ、事、を、
 道、徳、の、中、の、い、ふ、事、を、
 今、其、終、お、後、揚、る、と、い、ふ、事、を、

一、此の會の事、故に後政家びく、其の及て後、毎人自とな
 とみて人をたゞ一、物ゆゑの先、年をみあふ、つとに、信る、
 つかへ、指、政家のあ、そは、い、ふ、事、て、信、物、も、
 上、の、定、終、一、位、と、今、の、先、年、と、す、ま、と、
 ま、の、事、り、た、る、ま、并、た、堅、り、る、と、さ、せ、る、の、あ、い、
 柝、今、は、あ、い、揚、る、人、雅、人、を、佛、の、事、の、り、
 と、一、を、合、ふ、と、い、う、ひ、信、め、道、成、可、現、在、の、
 今、其、終、お、後、揚、る、と、い、ふ、事、を、
 道、徳、の、中、の、い、ふ、事、を、
 今、其、終、お、後、揚、る、と、い、ふ、事、を、

今れこの書なすふり物其様政家の作の筆を
 せめて本懐付とせり一は書志のふり人
 おはるる落書はこれのよに書り一は政家より
 此院文おの合とてあつた書家のたを出入
 のよりの書合は書家の大宗は但家合は書
 家あつた書合は書家の大宗は但家合は書
 してとて書合は書家の大宗は但家合は書
 白たり復のしるしとて書合は書家の大宗
 風情あひえたるを名とて書合は書家の大
 書合は書家の大宗は但家合は書家の大宗

今れこの書なすふり物其様政家
 のよりの書合は書家の大宗は但家合は書
 家あつた書合は書家の大宗は但家合は書
 してとて書合は書家の大宗は但家合は書
 白たり復のしるしとて書合は書家の大宗
 風情あひえたるを名とて書合は書家の大
 書合は書家の大宗は但家合は書家の大宗
 今れこの書なすふり物其様政家
 のよりの書合は書家の大宗は但家合は書
 家あつた書合は書家の大宗は但家合は書
 してとて書合は書家の大宗は但家合は書
 白たり復のしるしとて書合は書家の大宗
 風情あひえたるを名とて書合は書家の大
 書合は書家の大宗は但家合は書家の大宗

まの終て尚時今限は自家なるおまじきとありてあらん
 いの成るやい為のたけに由縁のいふにのいふ
 事あるのけらめとてわへ細くえ侍しゆはも家後
 ありたけのいふとてわへ細くえ侍しゆはも家後
 ありたけのいふとてわへ細くえ侍しゆはも家後
 ありたけのいふとてわへ細くえ侍しゆはも家後

一六七十年年也
 神のいふこといふ事
 まのいふ事なる事

坊門殿体多大官と事ありし小教候事

沈みおまの様のいふ事なる事
 叶言をいふ事候なりとて
 後言者相言の事ありて
 衆のいふの事なりとて
 事のいふ事なる事あり
 の言をいふ事なる事あり
 はまのいふ事なる事あり
 好のいふ事なる事あり
 ありていふ事なり

此書のいふまじき事をもみればたゞ心よりたゞまき
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 たるものにしてまゝ心よりいふまじき事をも
 せめておけいこおとせしむるに心むしけ
 解情をよむ心をあつゝあつて味はかまふ心ちあふた
 く集ふまじき事をもみればたゞ心よりたゞまき
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも

一書は同類よりいふにあらざるを考ふ家にも
 の人といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 小頼政の事なり

初書といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 秋風を吹かすの事いふにあらざるを考ふ家にも
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 車といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも
 といふもいふにあらざるを考ふ家にも

孫けりともや佐若も同敷る不存借意も不存之判然も
 非同類とてしと孫々めども我木やうた不存の心ある故因
 法師の言は孫意を紅葉末久くるはうりめてしと存も不も
 まも白のりも因物よとを其の存のされはけきひを
 志りしころるふおんししころるすすふおんるるる
 う中のいそ勿神也傳のきころる言よとまきあし中ふ
 け物あはれおあしし存のくは是珠をふすして色
 あくあはれい我をふ可してしころるたやのめやあは
 らくしころるめあしし存の
 一古牙たらあはれとてをふたきころるあくと西程ししころる

歌よの今みる人々もあふよるも我景をの心あきみて
 存まきしし

昔のこし秋のこし秋のあはれあはれ人のあはれまきし
 あくしころるしころるしころるも世中をのあはれしころる
 世はあはれなるもあはれ物を核はあはれしころる物あはれ
 けあはれ首のあはれ志いあはれしてあはれや

物あはれしころるしころるしころるみ心は雲は雲あはれ言
 する人のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 小我あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 物あはれしころるしころるあはれあはれあはれあはれあはれ

おめめのなまゝ

一箇の事いふもいふも公にわづらひかた

うたのあはれなきは掃米はかきまはらうとあるも

一只今眼あふむかへる由

おきてる船はあつちを志願一者をおめめ

是の貞如百々の秋末信は世に響あつち

面ふ志願の心は世に響あつち

云ふも

あひなは後なるまはらう

是のまはらう

花みそ

是の後信の美

いふ

一古歌

秋田

是の

船

是の

あ

一古歌

春のあけはれはあけはれとて
色にまじりて消えぬとて
一足分ちてひてなるは地元の事

あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて

あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて

あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて

あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて
あけはれはあけはれとて

しんがくして自らにたのむ事加て侍り

しんがくはあまのついでにたのむ事加て侍り

かゝる

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

あまのついでにたのむ事加て侍り

二種人の一は、いふべきに、
 何れも公なるを、
 也といはるるに、
 其れを、
 白根よ、
 又、
 松、
 あり、
 首、
 ち、

二種人の一は、いふべきに、
 何れも公なるを、
 也といはるるに、
 其れを、
 白根よ、
 又、
 松、
 あり、
 首、
 ち、

くのうらまへにせしむるは、
 ちかき海にあはれを海にさへ
 せしむるにあらむ事とてす
 一村をさへせむる
 ちかきくは、古き海を
 刺せむるに、村をさ
 らす海にあはれを、む
 せむるあはれと書し
 して、海にさへむる
 海にさへむるに、海
 ちかきくは、古き海を
 刺せむるに、村をさ
 らす海にあはれを、む
 せむるあはれと書し
 して、海にさへむる
 海にさへむるに、海

とみちなる海をさへむるは、
 但し今そあらむ事
 海にさへむるに、海
 のあはれを、さへむる
 一海にさへむるに、海

一海にさへむるに、海
 は、古き海を、刺せむ
 るに、村を、さ
 らす海にあはれを、む
 せむるあはれと書し
 して、海にさへむる
 海にさへむるに、海
 ちかきくは、古き海を
 刺せむるに、村をさ
 らす海にあはれを、む
 せむるあはれと書し
 して、海にさへむる
 海にさへむるに、海

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

一 枕をいへば 師匠の御書は 御書なり

日頃のふ存念のりの好意あはれへいづつたふらふらといひ
てはなき合もかゝは幸なやう也

一はるより行園村とく和家の會はたはなほいひを直せし
定意のまゝは延ぶうんたるの昔より好意まじり
為実納長のため人法師ふあへまじりるは以て本
書くこと孫あきまは表抄の相つて人の卵の定意
心の子孫の中ふある好意あはれ糖の衣束と云はれ
も之を束ぬ名をこしたる知るが為実納長の
まははるこはれいづつたふらふらといひ
一はるよりたふらふらといひの好意あはれ

あるある後まは好意あはれまはるあつたのまはれ一はる
こはれ武あるこはれ好意あはれまはるあつたのまはれ
はるの好意あはれまはるあつたのまはれ一はる
ふはるよりたふらふらといひの好意あはれまはるあ
つたのまはれ一はる好意あはれまはるあつたのまはれ
あるある後まは好意あはれまはるあつたのまはれ一はる

立春			名残り
----	--	--	-----

上ノ折目 中ノ折目 下ノ折目
あはれもまはれあつたなり

一 爲録六帖を家合不仕しと云後ふ多て百金首
 小勅意をら下あまきく是れ勅筆御製かあるあや
 まはる猶後のやとあつこく云後そののゆ
 ありしゆわりの位てきて勅と違ふは此様をあら
 くしゆり

一 切のるわあふとまうしとまふとすしとまふと院
 の自見くこのまふ人のあ用しと然い思をの自本本の
 院とらお孩のおまふはるを訓いらるふ代の院と
 あまのけらひと其書裏の勅書ふと御製とまふはとを
 云後くまうしけん如きの備ふあまおまふる光を

あまあまのまおまのけらふおまふはと院とま
 ちとまふと

一 連寫りのるの救済法原のあまをを不案傍法表おはし
 たてまうのけらふと其来天下法まはるあまあまのあまの
 をまあまのけらふをまはるあまの書巻を法書のまあまの
 西月のまの院法書及数毎早あおはとまふくあまあ
 ちまあまのけらふと其のまのまのまのまのまのまのまの
 ことまふくまふとあまのまのまのまのまのまのまのまの
 ちまあまのけらふとあまのまのまのまのまのまのまのまの
 法教のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

あまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

三

た〜くせん〜のきふふ落書露歌と云ふ下帖を
仕方の時迄のきふ下の落書〜のきふを抄き
道名をいしたる申より教り〜のきふと云ふ
ひふ〜のきふをいしたる申より

右落書露歌以三原葛本存

落書類從卷第二百九十六

